



宿院卓馬 (パノラマティクス プロデューサー)

河村佳祐 (パノラマティクス リサーチャー)

2006年 株式会社ライゾマティクス設立。メディアアート、広告、エンターテインメント、建築・都市開発などの領域で活動。2020年の組織変更で、社内の3部門のひとつ「アーキテクチャー部門」を「パノラマティクス」へと改める。SIAF2024では、パノラマティクスはイニシアティブ・パートナーとして、さっぽろ雪まつり 大通2丁目会場と札幌文化芸術交流センター SCARTS (一部) における展示構成・制作を担当。宿院・河村はともに北海道出身。

トーク内容

- 札幌と東京、アートプロジェクトを通じた関わり方
- 「期間限定Uターン」というかたちでの地域との接続
- 「コンピテンシー」と「やりがい搾取」
- 「MIND TRAIL」での経験と札幌での応用
- 「哲学」を共有できるか否か



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。

<https://youtu.be/o8zPEXS4Ehc>



Q 芸術祭の担い手たちはどこにいるか？

宿院： SIAFにはずっと関心を持っていました。というのも、今となっては東京の生活が長いのですが、生まれも育ちも札幌なんです。SIAF2024では2つの会場に関わり、私と河村もほぼ1か月札幌に滞在しました。いわば「期間限定Uターン人材」として、SIAFに関わることができた。外の視点がありつつも札幌への愛もある、「その地域出身で、都市圏でさまざまな経験を積んだ人」というのは地方芸術祭においていろいろと関わりしろがあるのではないかと思います。

大学進学で上京した自分にとっては、札幌で飲み歩くという経験があまりなく、今回の札幌滞在は地元の新たな魅力の発見にもなりました。そういった場所で自分の仕事の話をする「展示を見てきたよ」「こんな企画があったら面白いかも」という会話が生まれ、地域の人たちが芸術祭に対して自然に興味を持つ瞬間を目の当たりにしました。そうした日常の何気ない対話も、芸術祭を地域に根付かせる上で重要なのではないかと思います。「期間限定Uターン」として「札幌」と「東京」をつなぐ役割が、一時的なものではなく継続的に続けられるといいなと思っています。

河村： 私たちはさまざまな場所で、市民がその地域の未来について意見を出す場をつくっているのですが、SIAF2024では札幌市民からの声が400以上集まったんです。これだけ多くの回答数を得たことはこれまでの経験上なく、それだけ市民が札幌の未来について言いたいことがあるという意味で、札幌の未来に可能性を感じました。

とはいえ「仲間集め」はとても難しいとも感じています。パノラマティクスはさまざまな芸術祭に関わっていますが、その経験から言えば、芸術祭が目指しているものを一緒に目指せる、哲学を共有できるような人と一緒に作っていくことが大事だと思います。決して、一朝一夕ではできません。

例えば、パノラマティクス主宰の齋藤精一がプロデューサーとなり開催していた奈良県の奥大和の芸術祭「MIND TRAIL」では、アーティストが「こんな作品をつくりたいんです」といった翌日に、地元の職人さんがその骨組みを完成させていたということがあったんです。「若い人がたくさん来てくれるなら、頑張るか」なんて言って。ただの発注・受注関係ではなく、アーティストと地元の人が、それぞれの得意なものを持ち寄るような関係を時間をかけて築くこと、芸術祭の目的を共有すること。市民と一緒に芸術祭をつくるという点においては、そんなことが大事のように思います。
